

母親の育児意識に関する研究

—子育て支援利用者の調査回答パターン分析—

幸 順子・浅野 敬子*

Factorial analysis of behavioral and emotional representation in maternal activities by a questionnaire survey: factor scores of mothers participating in parenting support programs

Junko YUKI and Keiko ASANO

1. 問 題

現代日本の社会構造の変化に伴い、都市化と家庭の社会的孤立、核家族化、少子化が進行し、家庭における育児機能の低下や育児不安・子育て困難が指摘され、育児支援の必要性が主張されている。

現代においては、どのような育児支援が求められているのであろうか。

社会学的・心理学的研究として、柏木 (2008)¹⁾ は、日本社会における家族の歴史的変遷と現代の子育て事情をふまえ、現代においては、子育ての社会化に積極的価値をおいた育児支援が必要であることを主張している。また、小出 (1999)²⁾、伊志嶺・小出・柴田 (2001)³⁾ も、日本とカナダの育児意識比較調査研究を通して、日本における「孤独な子育て」の現状を指摘している。

一方、医療・母子保健分野における研究では、川井・庄司・千賀ほか (1999)⁴⁾ は、「育児困難感」と「母親の心理的問題」の関わりを指摘しており、また、木村・西内・平野 (小野)・高田 (2006)⁵⁾ は、「夫によるサポート」が育児意識を構成する重要な要素の一つであることを明らかにするとともに、核家族よりも拡大家族の方が育児ストレスが低いことを明らかにした。

また、乳幼児の母親のライフスタイルと育児意識の関わりに注目した研究として、菅野・田矢・柏木 (2003)⁶⁾ は、夫のサポートや夫婦関係の問題以外に、妻のフルタイム労働や自己実現の感覚が、妻の肯定的な育児意識と関係あることを明らかにした。更に、八重樫・小河 (2002)⁷⁾、小坂 (2004)⁸⁾ も育児意識と母親の就労形態との関連性について分析し、フルタイム労働の母親よりも専業主婦に親役割満足が低く育児不安が高い傾向があることを指摘している。

櫻谷 (2003)⁹⁾ は育児期の母親の生活や育児に関する現状を把握・分析し、今日的な問題として、子どもや子育てへの経験的理解のなさや育児不安や困難・不適切養育との関連性を指摘し、夫の育児参加への不十分さや、女性のライフスタイルの変化に伴う女性の就労および子育てをめぐる葛藤と就労支援の不十分さなどの実態を明らかにしている。

育児支援策については、家庭の養育者の意識、置かれた状況や抱える問題、社会状況とのかかわりのあり方など、育児不安や困難を生み出す要因を明確化し、ニーズに応じた支援策が立

* 至学館大学

案される必要がある。

育児意識を、育児情報や父親以外の人間関係など、より広範な社会的関係の中でとらえることとし、養育環境の状況や問題について実証的に明らかにするために、浅野・高橋・時安（2006）¹⁰⁾、浅野・百澤・山本（2008）¹¹⁾、幸・浅野（2010a）¹²⁾、幸・浅野（2010b）¹³⁾は育児状況に関わる項目36項目を用いて、保育園児（3～5歳）、幼稚園児、子育て支援利用（子どもの年齢範囲0～3歳）の母親を対象とした「育児意識」に関する質問紙調査を実施・分析し、母親の育児意識に関する因子構造の特徴を検討してきた（表1）。

表1 筆者らの「母親の育児意識に関する研究」の結果（因子構造について）

研究	対象	結果内容
浅野・高橋・時安(2006)	保育園児の母親	4因子構造:1育児拒否、2育児情報不足感、3夫との協力関係、4育児状況への安心感
浅野・百澤・山本他(2008)	幼稚園児の母親	5因子構造:1育児拒否、2育児情報不足感、3夫との協力、4社会的育児支援利用、5安定的育児協力の確保／4因子構造:1育児拒否、2安定的育児協力の確保、3夫との協力、4社会的育児支援利用
幸・浅野(2010a)	子育て支援利用の母親	6因子構造:1子どもに対する否定的な感情・行動傾向、2社会的育児支援資源の利用、3夫婦間の協力関係維持、4育児知識・技能についての不足感、5子どもからの自由、6子どもとの一体感／2因子構造:1育児に関する全般的安定感、2育児困難の感覚
幸・浅野(2010b)	全グループの母親	5因子構造:1子どもに対する否定的な感情・行動傾向、2社会的育児支援資源の利用、3育児知識・技能についての不足感、4夫婦間の協力関係維持、5子どもからの自由

ここでは、就労する母親と専業主婦の育児意識に関して①育児拒否、②育児情報不足感、③夫との協力、④安定的育児協力の確保（育児状況への安心感）などの因子が共通して抽出された。また、保育園児の母親は、保育園において提供されている支援が日常化し、社会的育児資源として自覚されないのに対して、幼稚園児の母親や子育て支援利用の母親においては、上記の因子に加えて「社会的育児支援利用」の因子が抽出され、他の育児支援資源に関心が寄せられる場合があることが示唆された。

2. 目 的

本研究では、保育園児（3～5歳）、幼稚園児、子育て支援利用（子どもの年齢範囲0～3歳）の全グループを総合して因子分析を行い育児意識構造を明らかにした、幸・浅野（2010b）¹³⁾（表1）の因子構造結果に基づき、子育て支援利用グループの因子得点に注目して調査回答パターンを分析し、特徴的な事例群を抽出し検討することを目的とした。

3. 方 法

質問紙

浅野ほか（2006）¹⁰⁾にて使用した質問項目および自由記述部分を、幸・浅野（2010a）¹²⁾、幸・浅野（2010b）¹³⁾では対象者に合わせて一部改変した。質問紙作成については浅野ほか（2006）¹⁰⁾に提示されている。なお、質問項目の改変は、部分的な表現上の改変であり、浅野ほか（2006、2008）^{10) 11)}の結果と合わせて分析するにあたって差し障りのない程度の変更である。本研究で問題とする子育て支援利用グループに使用した質問紙の項目内容は、幸・浅野（2010a）¹²⁾に

示されている。

基礎資料

浅野・高橋・時安 (2006)¹⁰⁾、浅野・百澤・山本 (2008)¹¹⁾、幸・浅野 (2010a)¹²⁾、幸・浅野 (2010b)¹³⁾ による、愛知県内O市公立保育園園児 (3～5歳)、C市私立幼稚園園児、K市公

付表1-1 全事例の因子得点 (事例1～50)

事例	因子1 子どもへの否定的感情行動	因子2 社会的育児支援利用	因子3 知識技能不足感	因子4 夫婦間協力	因子5 子どもからの自由
1				1.52	-1.39
2	-1.88	1.09		-1.84	1.04
3	-1.16			-1.76	-1.79
4		1.53			
5					-1.33
6		1.43			
7	-1.01	1.3		1.48	1.13
8		1.23		1.15	
9	-2.17		1.2		
10			1.19		-1.29
11					-1.28
12					
13		1.19			
14				1.9	-1.93
15	-1.31		1.77		-1.19
16		1.87			
17		1.09			-1.76
18			1.91	-1.09	
19		2.26	2.21		
20	-1.32		1.53		
21					
22					
23	-1.03	1.48	1.09		
24	-1.78			1.12	
25	-1.9	-3.04		1.88	-2.81
26	-2.65		2.17		
27					-1.35
28		1.03			
29	-1.29	1.65			
30	-1.45		-1.05		
31	-2.3	1.33			
32		1.39	1.46		
33	-1.83	1.04	1.61		
34		1.39	2.84		
35	-2.63	-3.64		-1.01	-1.76
36	-1.81			1.21	-1.95
37				1.03	
38	-2.1	-2.01	2.25	-1.16	
39					
40	-1.06	1.47		-1.93	
41	-1.16	-1.3			
42			1.89		
43				-1.62	
44	-1.36		1.45		-1.83
45			-1.47		-2.37
46			1.02		-1.75
47					-1.41
48	-1.58	1.67			-1.37
49		1.39			
50	-1.15				-1.55

※小数点3桁以下四捨五入し、1.0以上と-1.0以下を表示

付表1-2 全事例の因子得点 (事例51～100)

事例	因子1 子どもへの否定的感情行動	因子2 社会的育児支援利用	因子3 知識技能不足感	因子4 夫婦間協力	因子5 子どもからの自由
51			1.36		
52	-2			1.46	-1.77
53	-2.38				
54	-2.43				
55	-2.1			1.51	-2.39
56	-1.66		1.38		
57		1.03		1.17	-2.17
58	-1.7			-1.31	
59					
60					
61					
62		1.58			
63	1	1.66			
64		1.18		1.07	
65	-1.6	-1.14	1.33	1.13	-1.67
66	-1.22				-1.78
67	-1.53		2.45		
68	1.21		1.2		1.31
69	-1.9		2.14		
70	-1.34		1.29		
71		1.25		1.1	
72	-1.24			1.17	1.61
73	-1.43			1.16	-1.43
74			1.31		
75		-1.59			
76	-1.93			-1.42	-1.23
77	-1.31		2.48		1.62
78	-1.83	-1.33	1.76		1.18
79					-1.83
80	1.52	1.51			
81	-1.92			1.67	-2.4
82	1.23			1.12	
83	-1.51	1.17			
84	-2.13		2.05		-1.61
85			-1.21		
86	-2.29				
87		2.36			
88	1.01				
89		-1.66			-1.62
90	1		2.13		-1.13
91			1.05		
92				1.06	
93			1.31		
94					
95	1.04				
96					
97		1.1	1.34		
98					
99	-2.48			-2.34	
100	-1.08	1.32	1.35		

※小数点3桁以下四捨五入し、1.0以上と-1.0以下を表示

付表1-3 全事例の因子得点（事例101～150）

事例	因子1 子どもへの否定的感情行動	因子2 社会的育児支援利用	因子3 知識技能不足感	因子4 夫婦間協力	因子5 子どもからの自由
101					1.37
102				1.16	
103			1.2	-1.61	
104					-1.34
105					
106	-2	-3.6			-1.77
107		1.57	1.91		
108					-1.13
109		1.3		1.06	
110		1.66	-2.18	-1.41	-1.52
111		1.28			
112		1.41			-1.44
113					
114			-1.09	1.24	
115		1.24			
116	-1.33				
117		1.01			
118	-1.67			-1.68	-1.55
119		1.28		-1.08	
120	-1.47				-1.84
121					
122					-1.32
123			-1.27		
124		1.92			
125					
126		-1.59		-1.04	
127				1.11	1.03
128	-1.23		2.64	-1.56	-1.33
129					-0.67
130	1.31				-1.01
131				-1.37	1.39
132					
133	-1.24	1.78			
134	-1.84				
135					
136			1.53		
137	-1.95	1.13			
138					
139		1.34			
140			1	-1.01	-1.63
141	-1.46			1.37	-1.67
142					
143	-1.76			1.28	
144	-1.57		1.83	-2.71	
145	-1.56				
146	-1.24				
147	-1.57	-1.56		-1.76	
148				-1.09	-1.03
149					1.1
150			1.01	1.06	

※小数点3桁以下四捨五入し、1.0以上と-1.0以下を表示

立児童館親子教室参加（子どもの年齢範囲0～3歳）の母親を対象とした質問紙調査への回答545（うち保育園112、幼稚園283、子育て支援150）に基づく。

分析方法

全グループを総合した因子分析の結果（幸・浅野2010b¹³⁾）に基づき、子育て支援グループ150名について5因子（因子1：「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、因子2：「社会的育児支援資源の利用」、因子3：「育児知識・技能についての不足感」、因子4：「夫婦間の協力関係維持」、因子5：「子どもからの自由」）それぞれの因子得点を算出した。（資料付表1-1、1-2、1-3）

4. 結果

因子得点は平均値 = 0、標準偏差 = 1とした。全150事例の因子得点について、1.0以上あるいは-1.0以下の得点を付表1-1、付表1-2、付表1-3に示す。

因子1：「否定的感情・行動傾向」の得点の高低に注目し、因子1の因子得点が1.0以上の7事例を表2-1に示し、-1.0以下の59事例を表2-2に示した。

そのうち、その他の因子の回答パターンに特徴のある事例を表3-1、表3-2、表3-3、表3-4に取り上げた。

（1）否定的感情・行動傾向の高さと育児知識・技能の不足感

事例68、90

子どもの発達についての知識や子どもと接する上での技能がなく、子どもに怒りっぽくなる

という事例である。知識・技能の学習や経験の機会を提供することが有益な支援となる可能性がある。

（2）否定的感情・行動傾向の高さと支援への依存

事例63、80、82

表2-1 高 (HIGH) 否定的感情行動傾向群の
因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
63	1.00	1.66			
68	1.21		1.20		1.31
80	1.52	1.51			
82	1.23			1.12	
88	1.01				
90	1.00		2.13		-1.13
95	1.04				

表2-2 低 (LOW) 否定的感情行動傾向群の因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5		因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由	事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
2	-1.88	1.09		-1.84	1.04	67	-1.53		2.45		
3	-1.16			-1.76	-1.79	69	-1.9		2.14		
7	-1.01	1.3		1.48	1.13	70	-1.34		1.29		
9	-2.17		1.2			72	-1.24			1.17	1.61
15	-1.31		1.77		-1.19	73	-1.43			1.16	-1.43
20	-1.32		1.53			76	-1.93			-1.42	-1.23
23	-1.03	1.48	1.09			77	-1.31		2.48		1.62
24	-1.78			1.12		78	-1.83	-1.33	1.76		1.18
25	-1.9	-3.04		1.88	-2.81	81	-1.92			1.67	-2.4
26	-2.65		2.17			83	-1.51	1.17			
29	-1.29	1.65				84	-2.13		2.05		-1.61
30	-1.45		-1.05			86	-2.29				
31	-2.3	1.33				99	-2.48			-2.34	
33	-1.83	1.04	1.61			100	-1.08	1.32	1.35		
35	-2.63	-3.64		-1.01	-1.76	106	-2	-3.6			-1.77
36	-1.81			1.21	-1.95	116	-1.33				
38	-2.1	-2.01	2.25	-1.16		118	-1.67			-1.68	-1.55
40	-1.06	1.47		-1.93		120	-1.47				-1.84
41	-1.16	-1.3				128	-1.23		2.64	-1.56	-1.33
44	-1.36		1.45		-1.83	130	1.31				-1.01
48	-1.58	1.67			-1.37	133	-1.24	1.78			
50	-1.15				-1.55	134	-1.84				
52	-2			1.46	-1.77	137	-1.95	1.13			
53	-2.38					141	-1.46			1.37	-1.67
54	-2.43					143	-1.76			1.28	
55	-2.1			1.51	-2.39	144	-1.57		1.83	-2.71	
56	-1.66		1.38			145	-1.56				
58	-1.7			-1.31		146	-1.24				
65	-1.6	-1.14	1.33	1.13	-1.67	147	-1.57	-1.56		-1.76	
66	-1.22				-1.78						

表3-1 「高否定的感情・行動傾向と高育児知識・技能不足感」事例の因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
68	1.21		1.2		1.31
90	1		2.13		-1.13

※小数点3桁以下四捨五入

表3-2 「高否定的感情・行動傾向と高支援依存」事例の因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
63	1	1.66			
80	1.52	1.51			
82	1.23			1.12	

※小数点3桁以下四捨五入

表3-3 「低否定的感情・行動傾向と高社会的育児支援資源利用」事例の因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
2	-1.88	1.09		-1.84	1.04
7	-1.01	1.3		1.48	1.13
23	-1.03	1.48	1.09		
29	-1.29	1.65			
31	-2.3	1.33			
33	-1.83	1.04	1.61		
40	-1.06	1.47		-1.93	
48	-1.58	1.67			-1.37
83	-1.51	1.17			
100	-1.08	1.32	1.35		
133	-1.24	1.78			
137	-1.95	1.13			

※小数点3桁以下四捨五入

表3-4 「低否定的感情・行動傾向と高夫婦間協力関係維持」事例の因子得点

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
事例	子どもへの否定的感情行動	社会的育児支援利用	知識技能不足感	夫婦間協力	子どもからの自由
7	-1.01	1.3		1.48	1.13
24	-1.78			1.12	
25	-1.9	-3.04		1.88	-2.81
36	-1.81			1.21	-1.95
52	-2			1.46	-1.77
55	-2.1			1.51	-2.39
65	-1.6	-1.14	1.33	1.13	-1.67
72	-1.24			1.17	1.61
73	-1.43			1.16	-1.43
81	-1.92			1.67	-2.4
141	-1.46			1.37	-1.67
143	-1.76			1.28	

※小数点3桁以下四捨五入

社会的育児支援資源を多く利用していたり、夫婦間の協力関係も得られているが、子どもに否定的な事例である。子どもの育てにくさや親となることへの葛藤など複雑な問題が背景にある可能性がある。子どもの姿をより良く把握し親の成長発達を促せるような親子教室などが有益かもしれない。

（３）否定的感情・行動傾向の低さと社会的育児支援資源の利用

事例2、7、23、29、31、33、40、48、83、100、133、137

社会的育児支援資源を多く利用し、子育てを楽しんでいると思われる事例である。

（４）否定的感情・行動傾向の低さと夫婦間協力関係維持

事例7、24、25、36、52、55、65、72、73、81、141、143

夫婦間の協力関係が得られており、子育てを楽しんでいると思われる事例である。

上記（３）（４）のうち下線を引いた事例25、36、48、52、55、65、73、81、141は、子どもから離れられない状況でありながらも、家庭の内外での支援や協力が得られており、子どもを肯定的に受け止め、ゆとりをもって子育てしていると考えられる。とりわけ家庭内での協力が重要と思われる。

5. 考 察

結果より、子育て支援を利用しているような0～3歳の、より年少の子どもの育児に関しては、子どもに対して否定的な感情・行動傾向を強く持つ母親には、大きく分けて2タイプあることが明らかになった。

まず1つ目のタイプは、①子どもの発達についての知識や子どもと接する上での技能が不足し、子どもへの苛立ちにつながっていると思われるタイプである。こうした事例の場合は、自己の状態への自覚を母親に促して、育児の知識や技能について学習する機会を与えたり、他の母親などと育児経験を分かち合い、育児経験を豊かにしていけるような機会を提供することが有益な支援となるように思われる。

次に2つ目のタイプとしては、②社会的育児支援資源を多く利用していたり、夫婦間の協力関係も得られているが、子どもに否定的なタイプである。このような状態に陥る背景として、子どもの育てにくさや親となることへの葛藤・自信のなさなど複雑な問題が背景にある可能性がある。例えば、子どもの気質的特徴による育てにくさ等の問題がある場合は、親が子どもの特徴に気づき、子どもの捉え方の転換を図れるような、支持的支援を提供することが効果的かもしれない。子どもに発達上の何らかのつまずきの可能性（将来的な発達障害などのリスクの高さ）が考えられるような場合は、母子保健と連携して、親の不安にに応じていくような支援も有効となるだろう。更に、親となることへの葛藤や自信のなさ等の問題が考えられるような場合は、母親自身の心情に寄り添い、親としての成長を見守っていくような、親自身に対する支持的支援が有効になるかもしれない。いずれにせよ、こうした事例に対しては、ただ単に、子育ての知識や技能の学習機会を増やしたり、経験を増大させるような支援のみでなく、個別の事例の状況を良く把握し、支持的に支援していくような、母子保健を巻き込んだ心理治療的支援が必要となる可能性があると考えられる。

しかしながら、全体的に見ると、0～3歳のより年少の子どもの育児に関しては、子どもに対して否定的な感情・行動傾向を強く持つケース自体が150例中5例と比較的少なく、子育て支援を利用している母親の多くは子どもが0～3歳という幼少期には比較的安定的に育児をしていることが推察された。

次に、子どもに対する否定的な感情・行動傾向の非常に少ない母親についてである。これは150例中23事例に見られ、大きく3つのタイプに分けることができる。

そのうち1つ目は、③社会的育児支援資源を多く利用し、子育てを楽しんでいると思われるタイプである。0～3歳という、子どもがより年少の時期においては、母親が社会に開かれて、子育て仲間を多く持ち、情報が得られやすいということは、子どもへの否定的な感情・行動傾向の低さと強い相関関係にあると考えられる。

次に、2つ目として、④夫婦間の協力関係が得られており、子育てを楽しんでいると思われるタイプである。0～3歳という、子どもがより年少の時期においては、夫婦間の協力は、母親の子どもに対する情緒的・行動的安定と関わりが深いと考えられる。

更に3つ目として、⑤子どもから離れられない状況でありながらも、家庭の内外での支援や協力が得られており、子どもを肯定的に受け止め、ゆとりをもって子育てしていると思われるタイプである。

これらようなタイプの事例の中には、恐らく、地域の子育てサークル等のリーダーとして、

地域子育て支援における市民ボランティアなどの役割を担っていけるような母親も潜在しているかもしれない。

全体として、0～3歳という、子どもがより年少の時期においては、家庭内外での支援や協力が、母親の子どもに対する情緒的・行動的安定とかかわり合いが深く、そうした身近な支援は、母親が子どもから手を離せないような物理的余裕のない状況にあっても、母親の支援として一定の役割を果たしている様子が推察された。特に、⑤タイプのように子どもに手のかかる状況においてはとりわけ家庭内での夫の協力が重要と思われることを考慮すると、0～3歳の、より年少の子どもの安定的育児には、夫を巻き込んだ支援プログラムを工夫することが有効になるとと思われる。つまり、子育てに対する夫の理解を促進し、夫の育児参加を促進するような支援プログラムを組むことで、子育てへの育児困難感を改善し、安定的子育てにつなげられる可能性があることが実証的に示されたと言える。

保育所・幼稚園の母親の特徴との違いは今後の課題である。因子得点の水準で保育所・幼稚園の場合との差異、諸因子間の関係などを明らかにして、育児意識構造の違いをより明確にできるような分析を行い、育児意識の諸側面を整理して理解した上で、ニーズに応じた育児支援プログラムを探ること、つまり母親および家族のおかれ状況に対応した支援のあり方を計画していくことが課題となるであろう。

6. 要 約

育児意識調査の因子分析結果に基づき、子育て支援グループ150名について、5因子(因子1：子どもに対する否定的な感情・行動傾向、因子2：社会的育児支援資源の利用、因子3：育児知識・技能についての不足感、因子4：夫婦間の協力関係維持、因子5：子どもからの自由)それぞれの因子得点を算出した。

因子1：「否定的感情・行動傾向」の因子得点が1.0以上と-1.0以下の事例のうち、その他の因子の回答パターンに特徴のある事例群を抽出すると、下記の5タイプが見られた。(重複有り)

- ①育児知識・技能の不足から子どもに否定的：2例
- ②育児活動について葛藤的：3例
- ③社会的つながりがあり、主体的に育児：12例
- ④家庭内での支えがあり、主体的に育児：12例
- ⑤子どもに拘束されても家庭内外の支援的関係があり、主体的に育児できている：9例

0～3歳の、より年少の子どもの安定的育児には、夫を巻き込んだ関係形成型の支援プログラムを工夫することが有効になるとと思われる。

Abstract

We examined factor scores of the 5 factors, which are 1) emotional stress on nursing children 2) official support for nursing activity 3) informational and technological defects on nursing children 4) support from the husband 5) release from children, obtained from 150 mothers participating in parenting support programs.

We extracted cases in which the score of factor 5) is 1.0 and above or -1.0 and below and have some distinctive patterns in other factors as well, and found 5 types, partly overlapping, as follows.

- ① emotional stress caused by informational and technological defects: 2 cases
- ② conflict in nursing: 3 cases
- ③ responsible for nursing with official support: 12 cases
- ④ responsible for nursing with support from the husband: 12cases
- ⑤ responsible for nursing in spite of emotional stress: 9 cases

Our studies indicate that supporting programs are effective in nursing children of 3 and under.

7. 謝 辞

調査にご協力下さった春日井市子育て子育て総合支援館（かすがいげんきっこセンター）関係者の皆様に心より感謝します。

8. 文 献

- 1) 柏木恵子, 子どもが育つ条件—家族心理学から考える. pp.38-102, 岩波新書, (2008)
- 2) 小出まみ, 地域から生まれる支え合いの子育て. pp.19-30, ひとなる書房, (1999)
- 3) 伊志嶺美津子・小出まみ・柴田明子, 人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て支援システムの研究: 地域住民の主体性に依拠した子育て家庭支援策の構築に向けて. 資料, pp.1-4, 子ども家庭リソースセンター, (2001)
- 4) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子, 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ—育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成—. 日本総合愛育研究所紀要35, pp.109-143, (1999)
- 5) 木村一絵・西内恭子・平野(小原)裕子・高田ゆり子, 母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因. 九州大学医学部保健学科紀要, 第7号, pp.69-76, (2006)
- 6) 菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子, 父母の子育てへの感情はどのように異なるか—子ども・子育てに対する感情への規定院の検討—. 発達研究, 第17巻, pp.39-52, (2003)
- 7) 八重樫牧子・小河孝則, 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌Vol.12, No.2, pp.219-239, (2002)
- 8) 小坂千秋, 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因—就労形態からの検討—. 発達研究, 第18巻, pp.73-87 (2004)
- 9) 櫻谷眞理子, 今日の子育て不安・子育て支援を考える—乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて. 立命館人間科学研究, 第7号, pp.75-86, (2003)
- 10) 浅野敬子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 保育園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要40, pp.49-58, (2006)
- 11) 浅野敬子・百瀬真美・山本裕子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 幼稚園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要42, pp.115-123, (2008)
- 12) 幸 順子・浅野敬子, 母親の育児意識に関する研究: 子育て支援親子教室参加者の育児意識構造. 名古屋女子大学紀要第56号 (人文・社会編), pp.199-210, (2010a)
- 13) 幸 順子・浅野敬子, 母親の育児意識: 子育て支援利用の母親について. 日本保育学会第63回大会発表論文集, (2010b)

